

新島襄と科学

島 尾 永 康

新島襄がアーモスト大学で自然科学を修めて、バチラー・オブ・サイエンス（理学士）を取得したことはよく知られているが、かれが渡米前にすでに、当時の日本で得られる最高の科学教育を受けた少数者の一人であったことはじゅうぶん認識されていない。

一八五三年（嘉永六年）、ベリーの率いるアメリカ艦隊によって鎖国政策を放棄させられた幕府は、急ぎよ、海軍建設にのりだし、オランダ政府に正式に海軍教育班の派遣を依頼した。幕府の要請がきわめて急迫したもので、オランダ政府はとりあえず東インド艦隊所属のベレスライケン中佐を首班とする一行を長崎に送りこみ、一八五五年（安政二年）、長崎海軍伝習所が開かれた。伝習生は矢田堀景蔵、勝麟太郎ら幕臣三十六名、これに鹿兒島、佐賀などの諸藩の伝習生約一三〇名が参加を許された。(1) 学科は、航海術、運用術、造船学、砲術、船具学、測量学、算術、機関学、砲術訓練な

どであった。航海術とその基礎をなす数学がこれほど組織的に教授されたのは日本で初めてであった。しかもそれは従来の上の蘭学とは異なり、天測や蒸気船による実習をともなっていた。(2) 使用されたのはオランダが幕府に献上し、日本最初の軍艦となった観光丸である。一年数カ月の訓練によって、天測法、計算術、測量、地図作製などに長じた者が現われるにいたった。

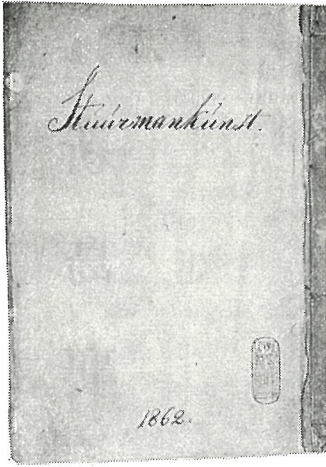
急場しのぎの第一次伝習が進行中、オランダ本国では優秀な士官カッテンデーキを首班とし、軍医ボンペを含む正式の海軍教育班が編成され、幕府が発注した軍艦ヤッパン号（威臨丸）に乗って長崎に到着したのが一八五七年（安政四年）九月、同じころ幕府の第二次伝習生も長崎につき、ここに第二次海軍伝習が開始された。

これより先、第一次伝習生は独力で観光丸を操って江戸にいたり、四月にはかれらを教官として築地に海軍操練所が開かれた。(3)

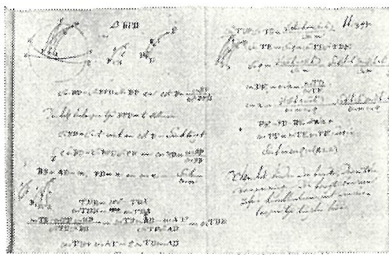
矢田堀景蔵を教授方頭取とし、多くの第一次伝習生を教授とする、日本人だけによる海軍教育がカッテンデーキには内緒で、(4) オランダ人による長崎の教育と平行して始められた。

一八五六年(安政三年)、安中藩主が藩士の優秀な子弟三名を選んでオランダ語を学ばせたのは、このような情勢に対処するためであった。一三歳の新島七五三太は最年少者としてその一人に選ばれた。このときの蘭学の師は安中藩士、田島順輔と考えられる。(5) 一年後、田島は幕命によって航海術研究のため長崎の第二次伝習生となる。(6) このため新島のオランダ語学習は一年でとぎれるが、三年後再び勉強を始め、天文学や物理学の簡単な論述が読めるようになる。

一八六〇年(万延元年) 十一月、新島は藩許をえて築地の海軍操練所に入った。この年、長崎第一次伝習生たちは、威臨丸による太平洋往復横断に成功して意気軒昂たるものがあつた。新島はその人



海軍操練所時代の新島のノートブック、Stuurmankunst (航海術) 1862年

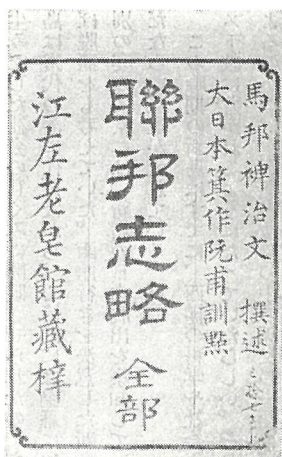


新島の球面三角法のノート

びとから直接航海術を学んだのである。教授科目は、測量と算術、造船、蒸気機関、船具運用、帆船調練、海上砲術、大小砲船打調練などであつた。この海軍操練所は明治政府によって受けつがれ、のちに帝国海軍の中核をなす海軍兵学校となつた。したがって新島は海軍兵学校の前身で最も早い時期に勉強したことになる。幕末の最高レベルの科学教育は、長崎と江戸の海軍でおこなわれたのである。

新島が江戸湾の外国軍艦を見て強い衝撃をうけたのは、ボストンで書いた「出国理由書」(一八六五年)では海軍操練所へ入る前であり、それから二〇年後の *My Younger Days* (1886) では入所後になっていて、記述にぐいちがいがあつた。(7) 幕府は、当然のことながら長崎よりも江戸を重視して、一八五八年(安政五年) 夏以降、観光、威臨、蟠龍、鵬翔の四艦隻を江戸湾に集結していたから、新島が目撃したのは幕府の艦隊だったかもしれない。それが外国製軍艦であつたことには変わりはない。

二年後(一八六二年、文久二年)、新島は悪性の麻疹にかかり、海軍操練所での勉強を続けられなくなる。恢復後、自費で甲賀源吾の塾に入って、測量、数学の勉強をつづけ、一年後、延長願いを藩に

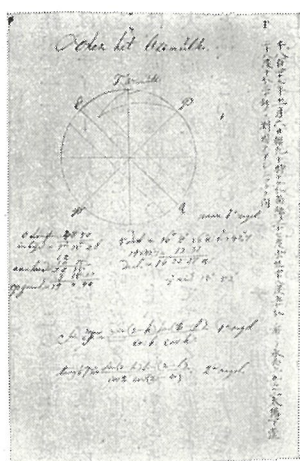


『聯邦志略』の扉

一八六〇年
(万延元年) 秋
から二年半は
どの間に、比
例算のような
最も基本的な
算術に始ま

操練所の教授にもなる人である。翌年（一八六三年、文久三年）、新島の航海術、数学の研究は、蘭学から英学にきり換えられる。これは幕府の蕃書調所の方針が変わったからである。

幕末における新島の洋学研究のノート類で、現在、遺品庫に保管されているのは約三〇点である。このうち六点が英学で、他は蘭学である。日づけの入っているものでは、オランダ語では文久二年一月朔日が最後のものであり、英語では文久三年四月一日が最も早い。



天測データによる方位角の計算（新島のノートブック）

出している。甲賀は長崎伝習所第一期生の矢田堀景蔵から航海学を学びのち海軍

り、連立方程式その他の代数計算から球面三角法までを、オランダ語ないし英語を通して習得しているのであるから、その精励ぶりは並たいいのものではない。残っているノートでは、航海術とその基礎である球面三角法に関する計算が最も多く、具体例としては天測による緯度計算が最も多い。幕末でこれだけ数学ができれば、数学者といつてよいであろう。この時期、日本の武士は、歴史上初めて、それまで無視していた数学を軍事科学として真剣に取り組んだのであった。（帰国後の新島の所有物に中国式天球儀があるのも、航海術に関連して天文学にも関心があったことを示している。）

一八六二年（文久二年）の一月から翌年一月にかけて、安中藩主であり、幕府老中でもあった板倉公の洋型帆船で、江戸と備中玉島間を往復しえたのは、新島にとってこよなき航海術実習となつた。

しかし新島は航海術と数学に習熟して、幕府のよき海軍士官となることに満足したのではない。二〇歳（一八六三年）の前半、若き新島にとって決定的に重要な意味をもつ三つの書物に接した。第一は邦訳のロビンソン・クルーソー漂流記、第二は中国駐在のアメリカ宣教師ブリッジマンが漢文で著わした、アメリカ合衆国の歴史地理『聯邦志略』（一八六二）、そして第三は漢訳聖書抜粋である。第一と第二は海外に対する強い関心を新島の心にひきおこした。とくに『聯邦志略』を読んだときの強烈な印象については、「脳髓が溶けたすほど驚いた」という奇矯で、迫力ある表現をしている。(8)『聯邦志略』は上海で刊行された翌年、早くも日本で読まれたのである。西洋文明の一所産である科学を学びつつあった新島は、それを

生みだした社会のしくみに開眼させられたのである。このころの新島は譜代の藩に仕えながら、情情的には倒幕に傾いており、しばしば脱藩をも考えていた。函館行きを決意した新島に対する家族の送別の宴の情景には、新島の日本脱出を察知していたかのような、ただならぬ気配が流れている。(9)

この時期の新島はすでに、西洋の科学や社会よりも、つよくキリスト教に惹かれるようになっていたらしい。それがいかなる事情によるのかは、漢訳聖書抜粋の中の天父の一語に感動した以外は明らかでない。のちにアメリカでも、「キリスト教宣教師に接することなく、印刷された書物だけによって聖霊が異教徒の心にはたらきかけた」稀な例とされた。密出国を助けたベルリン号の船長セイヴォリには、渡米の唯一の目的は英語を学んで聖書を日本語に訳すことだと新島はのべた。ピューリタニズムのニュー・イングランド出身の船長にとって、それは万金の重みをもつ言葉であつたらう。

上海で乗り換えたワイルド・ロヴァー号（ゆきあたりばつりの放浪者号）による航海は、上海からボストンまで、インド洋、希望峰経由で一カ月近くかかった。この航海中、最も楽しかったことは、テイラー船長といっしょに毎日、経度・緯度の計算をやったことだと新島（裏はこの船長が呼んだ。）に由来する）がのべているのは、海軍操練所以来の勉強が生かされたからであろう。一カ月の大航海を、たんなる船客としてでなく航海者としておこないえたことは、この時点では海軍操練所の同期生たちにもない体験であつた。船長の死後、バウディッチ『実用航海術』（一八五九）を形見として未亡人から贈られていた。

これに比べれば、フィリップス・アカデミーでの数学は程度の低いものであつた。アンドーヴァ神学校の学生で一年数カ月新島の勉強の相手をした同宿人フリントが、アーモスト大学のシリー教授あての推薦状の中で新島を評して、「きわめて優れた数学者であり、三角法や測量術を学ぶ意欲をもっている」とのべたのは、当然のことであろう。

フリントはまた新島が、西洋哲学の形而上学的抽象にはあまり興味がないこと、西洋の文学や詩には西洋の科学、歴史、倫理ほど心を奪われないこと、思弁や論争よりも、実際的、倫理的側面に惹かれることを指摘している。(10) 適切な指摘というべきであろうが、新島が武士であり、国防上の要請から西洋の科学を学んだのであること、したがって詩、文学などの閑文字にふける余裕がなかったこと、西洋の価値観はまだ当時の洋学には入ってこなかったことなどを考慮に入れなければならない。

函館での密出国からアーモストに落ち着くまでの綱渡りにも似た冒険をたどっていくとき、青年新島が、セイヴォリ船長、テイラー船長、ハーディ夫妻、ヒドゥン、フリントなど、つぎつぎに接する人びとに好意をもたれ、かれらを魅了していくのが感動的である。

二二歳でハーディ夫妻に会ってから没するまでの二五年間に、新島は何百通の手紙をかれらに書いたであろう。このおびただしい書簡をみて、ある感慨をもよおすにはいられない。新島に与えたハーディ夫妻の恩恵がいかに深いものであつたらうとも、一人の人間からこれだけの書簡をもらうのは稀有なことであつたらう。一九世紀はまだ書簡の時代であり、新島は書簡の妙手でもあつた。あ

わたらしい現代に比べて、人びとの心はこまやかに通い合っていたかにみえる。

当時のアーモスト大学のカリキュラムは、(1) 古典、自然科学、近代ヨーロッパ諸国語、人文科学からなる独特のもので、このうち、古典が最も多くて約三分の一を占め、自然科学がこれに次いだ。社会科学はきわめて少ない。それは古典も棄てきれず、さりとて近代科学も無視できないという、いわば過渡期のカリキュラムといえるだろう。しかも選択科目はきわめて少なかった。古典語は入学試験に課せられており、新島にその準備はなかったから、いわば選科生といった形で、一八六七—一八六八年の二年生に編入された。入学早々にキケロやデモステネスを原語で読むことになり、三年生になるとプラトン、ホメロス、タキトゥスといった調子であるから、新島の難渋のほどが察せられる。一方、新島得意の数学としては、解析幾何学、代数、力学、微積分、測量、航海術などが二年時の科目に集中している。自然科目としては、化学、解剖学、生理学、天文学、鉱物学、地質学、心理学、動物学、植物学などがあり、人文科学としては、論理学、哲学、修辞学、英文学、美術があり、他にアナロジー、雄弁術、体操がある。ドイツ語ではシラーのヴァレンシュタインを読んでいる。(新島の一七年後アーモストを卒業した内村鑑三が、『流罪録』にのべているカリキュラムもほとんどこれと変わっていない。②) 当時はまだスポーツに熱中する時代でもなく、学業が重視されたが、アーモストは何らかの専門家を養成する大学ではなかった。旧制高等学校の文科と理科の分離していないものといったところであろう。

アーモストの最大の特徴は、キリスト教との深い結びつきにある。宗教を語らずしてアーモストの歴史は語れない、といわれる。(3) 一八二一年の創立から一八九二年のクラスまでの卒業生、三、四二八名中、聖職者一、一六四名、外国伝道者二二〇名(『聯邦志略』の著者ブリッジマンもその一人)を出しているから、実に三三%が宗教家である。したがってアーモストの唯一の主要な目的は、会衆派の牧師を作ることだといわれもした。フィリップス・アカデミー在学中に洗礼を受け、聖職者を志していた新島にとって、これ以上ふさわしい大学は考えられなかったであろう。しかしこのパーセンテージは、南北戦争以後、一〇代に減少していく。

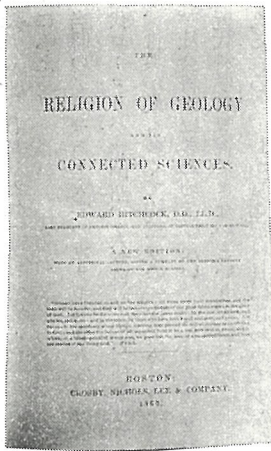
新島は、一八七〇年にバチラー・オブ・サイエンスを取得している。一八九〇年までのアーモストの卒業生名簿によれば、バチラー・オブ・サイエンス取得者は、新島の前には、一八五〇年代に六



アーモスト大学の地質学者、
エドワード・ヒチコック
(1793—1864)

名、六〇年代に二名、新島の後には、一八八七年に内村鑑三がいるにすぎない。その他はすべてバチラー・オブ・アーツである。

アーモストでは、地質学者エドワード・ヒチコック（一七九三—一八六四）の学長時代の一八五二年に、自然科学の部門を設立し、正規の課程とは別に、地質学、数学、物理学、化学、農学、鉱物学、動物学、植物学、心理学を専攻できるようにした。一八五三年には二名の学生が、一八五四年には一七名がこのコースを取った。このうちの六名が前述のようにバチラー・オブ・サイエンスになったのである。しかし三年目の一八五七年には一名の志望者もなかった。ここにおいてアーモストは、自然科学の課程をあきらめ、再び本来のニュー・イングランドのキリスト教主義カレッジの伝統を固執することになった。アーモストは、一八三〇年代には学生数においてハーヴァードを凌ぎ、最大のイェールに次ぐ活況を呈したが、その後学生数は減少した。自然科学に関しては、ハーヴァードに一八四七年にローレンス理科学校が設立され、イェールでは、ドイツの化学者リービヒの影響によって応用化学校が設立され（一八四七、



ヒチコック著『地質学の宗教』（1860）新島蔵書

これがイェール理科学校（一八五四）をへて、シェフィールド理科学校（一八六一）へと充実拡張されていった。④アーモストは、設備と陣容の点でこれらと匹敵できなかったのである。しかし新島は、ヒチコックが期待したような自然科学系のアーモスト学生だったのである。

ヒチコックはアーモストの自然科学の一枚看板だった。新島が入学する三年前に亡くなっていたが、その全米的な名声、三〇版を重ねたその地質学入門書、一〇年にわたるアーモストの学長在職中、アーモストに作らせた自然科学の諸設備、とくに鉱物コレクションなどによってかれの影響は濃厚に残り、新島に地質学への興味をおこさせたことと考えられる。かれは大学を出ておらず、その地質学研究はイェールのシリマン教授やアーモストのイートン教授と連絡しつつ独学したものであるが、そのようにして一流の地質学者になりえたのは、当時のアメリカの科学界がまだ揺籠期だったことと、この時期の地質学がアマチュアでも比較的容易に貢献できたこととによる。マサチューセッツ州の地質調査を初めておこない、マサチューセッツ州とヴァーモント州の地質調査官になった。かれはまたアメリカ科学界の近代的制度化、学問的自立にも少なからず貢献した。一八四〇年には、アメリカ地質学者協会の創立者の一人となったが、アメリカ科学振興協会（A.A.S.）はこれから生まれたのである（一八四八）。一八五〇年には欧洲を歴訪し、エディンバラにおける英国科学振興協会（B.A.S.）の集会にも出席した。一八六三年には全米科学アカデミーの創立委員にもなった。

かれはヴェルナー的な水成論の立場から、ドイツの岩石標本を使

つて、ニュー・イングランドの地層を同定した。地表形成における氷河や洪水の作用も大きく評価したので、地表に作用する力の強さについては、斉一論者でなく激変論者であった。コネティカット溪谷に関するかれの重要な著作『地表地層学の解説』（一八五七）でも、河川作用に固執している。と同時に、岩石形成における熱と圧力の作用をも認めざるをえなくなっていた。古生物学では、コネティカット溪谷の三疊紀砂岩にのこる巨大な足跡を研究して、それが恐龍のものでなく古代の鳥のものであるとした。♯ヒチコック著『コネティカット溪谷の砂岩についての報告』（一八五八）は、アメリカ博物学史の古典として、今日でも複製版が入手できる。

保守的な水成論の色合いが残っているヒチコックの地質学は、宗教と深く結びついていた。もともと地質学は聖書の創世記とのかかわりの深い学問であった。スコットランドのジェームズ・ハットン、すでに一八世紀末に、地質学が宗教と無関係であることを言明していたが、イングランドでは一九世紀前半でも、オクスフォードのバックランドや、ケインブリジのセジウィックなど有力地質学者は聖職者でもあった。かれらは、適切に解釈すれば、地質学は自然宗教に役だつことができると考えていた。近代地質学の原点とされるライエル『地質学原理』（一八三一、三三）では、さすがに宗教色は払拭されたが、保守的なニュー・イングランドのカレッジでは一九世紀後半になっても、地質学と宗教は深いかかわりをもっていたのである。ヒチコックがイェール神学校で学び、一時、牧師をしていたことも、一九世紀前半のオクスブリジの聖職者―地質学者と似た立場であった。ヒチコックの『地質学の宗教』（一八五一）は、

神学の真理と科学のそれは一致すると論じたものである。新島はこの書物の一八六〇年版を、一八七三年にアンドーヴァーで購入している。鉛筆で引かれた傍線は、それが終わりまで読まれたことを示している。幕府の海軍操練所で軍事科学としての航海術と数学に打ち込んだ新島は、今やニュー・イングランドの大自然と密着し、宗教と深くかかわった科学としての地質学を発見した。といっても、それは、かれが地質学の実用性を看過したことを意味しない。新島の鉱物採集はアーモストに入学した翌年から始まるが、日本にいたとき日本は農業国であると思っていたが、今では鉱業国でもあることに気づいたとのべている。♯一九世紀の博物学者の多くは航海の経験者であった。函館からボストンまで一年余りの航海を経験した新島も博物学に転じていく。

新島はマサチューセッツ、コネティカット、ロード・アイランドなどを広く旅して、各地の鉱山や、大学、博物館の鉱物コレクションを見学している。鉱石採集旅行は、アンドーヴァー神学校入学後もつづけられた。新島旧邸の蔵書には、ライエルの『地質学原理』第一版（一八七三、四）や、ル・コントの『地質学概論』（一八八四）があり、アンダーラインが施されているところをみれば、帰国後も地質学への興味は持続していたのである。一八八七年（明治二〇年）清水滝次郎が同志社英学校を中退し、新島の添書をもって米国に留学して地質学を学んだのは、明らかに地質学への新島の深い関心を反映しているであろう。科学的には、地質学は進化論への序曲だったことを考えると、新島蔵書の中に、ウォレス『自然選択の理論』（一八七〇）があるのも偶然ではあるまい。

航海術、数学から地質学まで、数理的・科学から自然誌に及ぶ新島の科学とのかかわりは幅広い。科学の成果を自然神学的に解釈する伝統がニュー・イングランドにあったことを思えば、自然科学を愛好した新島が、バチラー・オブ・サイエンスとして神学校に進んだのは、ギリシア・ラテンの古典を愛好するバチラー・オブ・アーツとして神学に進む以上に、自然でもあり必然的ななりゆきであった。

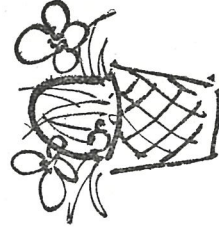
(付記) 新島在学中のアーモストの要覧、その他貴重な資料と、新島研究についての助言を与えられた井上勝也教授、『聯邦志略』を貸与された人文研の杉井六郎教授、新島遺品資料の閲覧その他に多大の便宜をおはかりくださった河野仁昭氏、松井全氏その他、史料編纂所のかたがた、図版を作ってくださった尾淵吉倫氏、および大阪府立図書館の仲田憲弘課長にお礼申し上げる。

(大学工学部教授・科学史)

(注)

- (1) 勝遊舟『遊軍歴史』(昭和四二年)六二(ページ)。
- (2) 武田楠雄『維新と科学』(岩波新書)三二。
- (3) 浜野章吉編『蝦夷紀事——阿部伊勢守軍實』(明治三三年)八三八。
- (4) 水田信利『播磨時代の日本遊軍』(昭和一八年)六七。
- (5) 九年後ボストンで新島が認めた出国理由書では杉田としているが、(A. S. Hardy: *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*, Boston and New York, 1892, p. 23) ここでは『新島義先生謹年譜』の説をとる。
- (6) 第二次伝習生名簿に、板倉主計頭家来、田島順助の名がみえる。『遊軍歴史』八九。
- (7) 和田洋一『新島義』五五。
- (8) A. S. Hardy, *ibid.*, p. 4.

- (9) *Ibid.*, p. 33.
- (10) *Ibid.*, p. 72.
- (11) *Catalogue of the Officers and Students of Amherst College*, 1867-68, 1868-69, 1869-70.
- (12) 『西村鑑三著作集』第一巻(昭和二八年)二四五。
- (13) W. S. Tyler: *A History of Amherst College, 1821-1891*, New York, 1895, p. iv.
- (14) J. F. Fulton: *Benjamin Silliman*, New York, 1947, p. 204.
- (15) C. C. Gillispie ed.: *Dictionary of Scientific Biography*, Vol. VI, (1972) p. 437.
- (16) A. S. Hardy, *ibid.*, p. 83.



新島襄と柏木義円

井 殿 園

一、はじめに

安中には、柏木義円から直接教えを受け、受洗した信徒が、今なお多数いる。柏木を知っている人はもちろん多い。彼らの多くは、柏木について、草深い野にあって非戦論を唱え、キリスト教社会主義を説き、国家権力に抵抗した人としてよりも、温順な慈父のごとき人、熱心に足を運んで牧会活動、訪問伝道をした人として強く記憶し、人格的影響も受けている。

柏木自身は、根本的には聖書に基づく十字架を中心とした信仰の力に影響されたことは

言うまでもないが、そのほかに、幼時からの母の感化、同志社での新島襄からの決定的とも言える人格的感化、影響のあることも無視できない。

以下、柏木の書き残したものを中心にしなから、彼が新島襄と出合い影響をうけたところを探ってみることにした。

二、柏木が新島に出会うまで

柏木は、一八六〇年（万延元年）信濃川のはとり新潟県三島郡与板に父徳円、母よしの長男として生まれた。父は与板の浄土真宗西光寺の住職であったが、義円の生後四カ月で死

去。貧しい中を母の手で姉三人とともに養育された。母は、時に虚言をはくくせのあった義円を痛く憂い、「虚言は諸悪の本」と言つて拳で頭を打つたこともある。（「予が回心の顛末」『上毛救界月報』二六号——以下『月報』と略称）。十二歳のころ維新を迎え、藩士に還るか将た寺を継続するかを決断を求められ、「母は断然寺を継続して禄を離るるの決心をなして之に答えたり」（母の死に就いて『月報』一四号）という。彼はここに母の信念を見、強い感化を受けた。

やがて新潟師範から東京師範へと学び、十九歳で同校小学部師範科を卒業。さらに中学師範科へ進むことを望んだが、かなえられずに卒業したことはかなり不満であった。「卒業証書授与式の時に卒業証書を渡さるるや即座に開き見て之を点検し、四辺を睥睨して席に復するといふような真似もした」（先師に對する予がざんげ）『月報』二七号。ことに、その不満が表われている。卒業後任地について師範学校の推薦が得られなかったが、「遂にその果は上州の山の奥なる土塩村（どしほむら）の小さい小学校へ赴任することになった」（同右）『月報』二七号。

一八七九年、彼はその小学校を会場にして、仏基神三者合同演説会を友人根岸とともに開催し、安中教会牧師の海老名弾正の話聞き、初めてキリスト教と接触をもち聖書を学ぶことになった。そこで翌年同志社英学校に入学し、新島襄に出会う。「当時先生はリーダーを教えて下さったが、スシキントという発音がよくできないで先生は一生懸命になって幾十回となく直して下さるけれどもできないので余りきまりが悪くて笑ったら先生は儼然として笑ってはいかんと仰せられた。その時予は予の不真面目を羞じ、実に冷汗が出た」

「予がざんげ」『月報』二二七号。また新島の約翰書講義を三十番教室で聞いたとき、祈りを指名され、未信者で祈る心もないのに口先ばかりの祈りをして新島を欺いたことを懺悔している。学資の足しにと漢文を教えたが、手違いで手当が渡されず、大いに窮して新島の所へ金を借りに行き、快よく貸して下さったことに感激している。しかし学資は続かず、一年で休学して上州へ帰り、九十九村の小学校で再び教壇に立つことになったが、純朴な農村の生徒らの前に自らの嘘つきを取じ、教師としての資格は無いと悩んだ。さら

に眼病にかかって、思うほど読書もできず失望が深まった。そのとき、友人中山光五郎に誘われ、安中教会に出席し始め、一八八三年十一月四日、礼拝の中で聖餐式の際の海老名の祈りにふれて回心、翌年一月、彼より受洗した。その受洗を新島に知らせたところ、よろこびと励ましの返信が新島から届き、柏木は大いに感激した。

三、同志社時代

柏木は再び同志社に入学し、普通学校で五年間学んだ。食堂規則に違反した柏木を、新島は自宅へ呼び、違反は不注意から出たものと信じている、しかし法は法であるから、処罰は受けるようにと諭し、罰金は代わって出しておくと言われた。柏木はたいへん恐縮している。また、五年間木綿の紋付羽織で通した柏木を心にとめていた新島は、卒業式前に、「羽織袴を新調して贈りたい」と言った。柏木は恐縮し辞退したようである、後に「今にして頂戴しておいて永く記念とすればよかった」と記している。また、卒業して帰郷するにあたり、柏木の肩に手をおいて、新島から「君にコンフィデンスをおく」とくりかえし

言われて感銘を受けている。

一八八八年十一月一日、柏木は新島から英文の手紙を受けとり、参上した。新島は「予は校医から学生諸君に面会することを禁じられおるが、会って話さねば胸が破裂しそうだから君だけに来てもらったのだ」ともらし、学校に関して憂慮している点、さらに一致、組合教会の合同問題について話し、もし合同

がなるならば、自分は北海道に退くともらした。柏木はその時の新島の沈痛なる面持ちが、今もなお髣髴として眼に在ると後に書いている『教会合同論』『月報』三七三三号。

この十一月一日夜の新島との話しあいは、柏木に決定的な影響を与えたともてよい。「校医は心臓拡大もはや元に復し難く候に付、何時変が来るか知れぬと被申候」（ハーディ宛書簡）という状態で、教会合同問題と大学設立運動に「その心血を絞られた」と、柏木はみている。デビス・浮田和民が新島に賛同したほかは、新島の片腕といわれた金森を始め、小崎弘道、宮川経輝、海老名らがこぞって新島に反対したこの教会合同問題を前にして、「実に孤影凜然たる有様」の新島を見たのである。このとき、一学生にすぎなかった柏木の

みが自宅に招かれ、その心中の苦悩を打ちあけられたことは、その内容も極めて重要であるが、柏木自身が新島に格別に信頼されていることを、何よりも具体的に示すものとして受けとめたに違いない。その夜の柏木は、新島に特に信頼されたことに感動し、自らの責任の重さにおののいた。「我にして先生の信任を得る何物があったか。我らの神を信ずるは神先ず我を信じて信仰を賜ったからである」(『同志社初代の回顧』『月報』四三六号)と、柏木は懐古している。

一八八九年六月、同志社を卒業した彼は、同志社予備校主任として教師になった。翌年新島は旅先で病を得、大磯で、同志社の将来を案じつつ遺言し、「もう地上で働らく元氣は全くない。ピース、ピース」「もう逝く」と言い残して召天した。柏木は、新島家邸で靈柩を迎え、祈禱を献げた(湯浅与三『新島襄伝』三四七頁)。後年柏木は、しばしば『月報』に新島の臨終のことを記している。「死を決して邁進したる新島襄先生」『月報』三三〇号、「最終百有餘日の新島襄先生」『月報』四三五号、「新島襄先生伝について」『月報』四五一号はか。

四、安中教会へ

新島召天の年の十月から、熊本バンドの地、熊本英学校へ校長代理として出向いて二カ年を過ごした柏木は、一教師奥村氏の解雇をめぐる問題で学校と対立、辞任し、帰京して再び同志社予備校主任となっている。母よう、を新潟より招き、平瀬かや子と結婚して家庭を持った。しかし数年後の一八九七年「ひそかに墳墓の地と心に期していた同志社を」(『安中の三十有八年』『月報』四五二号)退いた。その経緯については、「湯浅治郎氏が小崎校長に反対して、小崎、浮田二氏の辞職となつたから、予は亦二氏に同情して直ちに辞表を提出し、東京に去つたのである。然るに予が東京に出るや安中教会は……予をその牧師に招聘した」(同前、また「懐い出するまゝ」『月報』四〇五号)と記しているが、伊谷隆一氏は、「キリスト教主義をかかげ……『有為の士』育成の場として同志社を建て、独り苦悶した新島」の精神を忘れ、「宣教師に対して己れが信仰の箇条を明確にし得ない同志社」、「中学校教育より聖書を削除する同志社」への絶望が、柏木をして同志社を去らしめたと見て

いる。彼の見方には真実性がある(伊谷『非戦の思想』九十九頁以下)。同志社を去った柏木に湯浅は心を痛め、自らの母教会安中が無牧に苦しんでいるのを思い、安中の山田、吉沢の二氏を東京へ送って招聘せしめたと見ることでできよう。

安中へと柏木をうながし、向かわしめ、安中に生涯ふみとどまらしめたものは何であつたか。湯浅治郎をはじめ安中教会員の「愛と寛忍」によると同時に「予の慈母と愛児とは予が先祖と浅からざる関係にあるとおぼしき西方寺の墓地に葬られたり」(『母の思い出』『月報』)し地であること、何よりも新島ゆかりの地、新島の伝道の最初の結実として設立された教会であること、さらに柏木自身が最初にキリスト教に接し、受洗した教会であつたことなどが大きな理由であろう。安中は柏木にとって、「他ならぬ彼の血縁上の祖の地であり、信仰上の祖新島の地であり、そして彼自身の受洗の苦しみと歓喜をもたらした地であつた」(伊谷、前出書一〇二頁)。

五、柏木が新島から受けた影響

柏木はよく人を訪ね、手紙を書いた。結核

に冒されて捨てられた者の病床で、聖書を説き、祈り、救いへ導いた。定めた日には求道者を訪ね、特別な教導をした。障害者にも懇切に対応した。柏木の感化はひろく深い。四十年、五十年を経過した今日でも生きた言葉として伝わってくる。

特に柏木は、新島から受けた人格的なものを重視する態度、「いと小さき者を心にとめる」こと、「戸毎に説き、人毎に諭す」ことを牧会者としての姿勢、伝道の実践の中に示している。「キリストはよく一人一人を説き、一人一人を愛し、而して一人一人のために死に給うた。世界人類を救うの道はこれ以外にない、一人が一人、聖国を来らすの道はこれ以外には無い」(「個人伝道」『月報』四二三号)。「九九匹の羊を置いて一匹の迷える羊を尋ね、九九人の義人をおいて一人の罪人を追い給うのがキリストの親心である。十字架はその頂点である」(「キリストと其十字架」『月報』三二四号)。「戸毎に説き、人毎に諭すが如きまだるき事では百年河清を待つと一般にて迂遠の極なり」と福沢諭吉は言うが、新島先生は「戸毎に説き人毎に諭す」という所謂迂遠の事を以て個人個人の心霊を改変し、之を聖め、

之を高めるに非ざれば到底真正なる文明社会を致す事能わずと為し極力教育と宣教とに尽瘁せられたり。「先生亦個人伝道に熱心なりき」(「吾人の眼に映じたる新島襄先生」『月報』四一六号、「個人伝道」同四二三号)と記し、これを新島より教示感化されたものと自負している。さらに柏木は、「先生は国のため、社会のため、君のためには死ぬことはしても一人のために死し得ない人ではなかった。九九匹の羊を野においても一匹の亡羊を尋ね、悔改の必要な九九の義人よりも悔改むる一人の罪人を追い求め、義人の為、仁者の為ならず、我ら罪人のために死に給うたるキリストの心をもつて心としたる先生はいと微き一人のために死に得る方であつた」とのべ、「先生の教育精神も亦そこにあつた、されば級中の最も劣れる者に心を注ぐをもつて教育の最良方法となし、学校の祝会に於て、放校せられたる二、三の学生を憶つて泣き給うた。決して有望の青年は愛するも平凡の学生は顧みないという軽薄な教育家ではなかった。而してこれは先生が全世界よりも重き一人の価値、神の肖像たる人格の尊貴無限を認めておられたからである」、「先生は亦此精神より一

人一人の靈魂の救いを重んじ給うた。そして人に接するの機会さえあれば、何人にも道を説くの機を逸し給わなかつた。たまたまこれを逸する事があれば後で深く悔いて自ら責め給うた」(「新島襄先生を憶う」『月報』三五九号)と述べているところにも、彼の中に新島が生きていたとみることが出来る。授業を休んだ生徒をその寮に訪ねる先生(「同志社初代の回顧」『月報』四三六号)、校僕を「五平さん」と呼ぶ先生、車夫を「車屋さん」と呼ぶ先生「同志社の門をくぐつた者のためには」心を配る先生に、柏木が感銘を受けていたことは、『月報』でたびたびとりあげているところでも明らかである。柏木はこれを、安中の牧会者としての働きのなかにみごとに反映し実行している。

六、柏木が新島から受けた影響

——その二——

『上毛教界月報』を、柏木は安中赴任の翌年一八九八年に創刊し、辞任の翌年一九三六年に廃刊するまで、延べ四五九号をみずから編集し、発行し続けた。これは彼の主張、論説の非凡をよく示していると同時に、彼のなみなみならぬ熱意と努力の持続を示している。

いわばこの『月報』に、彼の生涯は傾けられ、自らの生命を燃焼させたと見えよう。彼は安中の牧会のほか、数々の伝道地の巡回、求道者、病者の訪問に精力を傾けた。一九〇八年の母の死を『月報』に記した文章によって、

伝道地から帰ると、母は意識不明、そのまま召天、葬儀を終えたその夕には伝道地に向向いていることが知られる。じっとしていることが耐えられなかったとはいえ、柏木にとつては伝道地の集會は重大であつた。新島記念會堂建築事業を進める途中、九人の子供を生まみ育てていたかや子夫人を五十一歳で突然失つてゐる。一九一八年のことである。時に長男は在米、次男は病氣静養中、就学中の六人の子供をかかえて疲れ果て病床につき、一号が休刊となつたこともあつたが、再び立ちあがつて筆をとり、組合教會の朝鮮伝道を批判して行くあたり、すさまじいほどの不屈の柏木を感じないわけにはいかない。また、前後十一回に及ぶ『月報』発行禁止の処分を受けつつも、弾圧に耐え、継続発行して行く柏木の執念は、尋常ではない。この『月報』発行の姿の中に、自らの主義を貫徹し、信念に殉じて行く姿勢をみる。これは柏木の生來の性

質の一つとも言えよう。また母より、から身をもつて示されたところを習得したものとも言えよう。「信心厚かりき」という柏木の母は、「會堂に住しても仏像に向つて朝夕の勤行欠かしたることなく、西広寺説教日にも大抵欠かさず参詣した」（母の死について）『月報』

一四四号。牧師館の中に住み、家族とともに讚美し祈つてはいて、終生自らの信心を守り通した。柏木をしても改宗入信せしめ得なかつたほど、強い宗教的節操が母にはあつた。

さらに柏木は、この主義と信念を貫徹する生き方を、同志社を設立し維持して行く中で、伝道に募金に生命を注いだ新島から学んだと見ることができないだろうか。

「新島先生と一致組合教會合同問題」（『月報』三六九号）で、小崎の同志社における「我宗教化の一経綸」と題する講演に反論しているが、柏木は「新島先生はミルトン一流の流れを汲む清教徒の風格を具え、真正なる自由、自治主義者にして一人一人の人格の尊嚴を尊重して神と人との間に何者の介入をも許さず、事業を棄てても決して妥協を肯んぜざる主義の人」であると強調し、いわゆる合同問題については、「合同にして若し成らば、合

同教會とは勿論手を別ち、当然合同教會の機關たるべき最愛の同志社をさへ去つて北海道に退かんとまで決心しておられた」新島の、自らの信念に殉ずる姿に感銘を受け、「心中は実に慘憺たるものであつた」新島を察している。

柏木の『月報』発行の執念と、自らの主義を叫び続けて行く熱意は、こうした「たとえ事業を捨てることにならうとも」自らの信念を貫いて行く新島からの感化によるところ大であつたと言えよう。

柏木は礼節を重んじた。いかなる人に対しても、道で会えば、深々と頭を下げた。同志社に学び、柏木家に寄宿したことのある山川均は、少年のころ（京極小学校通学中、登校途上で新島に会い、挨拶すると、新島が深々と帽子をとり、頭を下げたのに驚いたという。丑木は東京師範卒業の日、証書を手にし、四辺を睥睨する高慢さを表したが、これも新島に接して変えられたとも見ることができようか。

七、終わりに

新島の生涯を顧み、柏木の生涯をたどり、

この二つを重ね合わせると種々一致する特徴を見出す思いがする。柏木が新島に直接交わりを持ったのは五カ年余りと考えられる。たとえその期間は短かくても、受けた影響は大きく、また永く深く及んでいると言わざるを得ない。

柏木は晩年、新島伝を書くことを求められ、みずから努めたが、実現しなかった。徳富に早くから執筆を乞われ、自分でなければと思うところもあったことは否めない。「新島襄先生伝に就いて」『月報』三七七号。周到に準備を始めたが、あまりに大きい影響を受けた柏木には、筆を進めることができなかったのかも知れない。完成させるにじゅうぶんな体力を、既にそのとき消耗し切っていた。

柏木は安中教会で四十年余、歩き説き書き続けた。安中を自らの地と思ひ定めて生き続けることに限りない喜びと誇り、感謝を抱いている。「二つの感謝」『月報』三六〇号、「安中の三十有八年」同四五一号、「我家と安中―告別―」同四五九号。彼は長男を原市に、五男を安中に招いた。柏木を通して、新島の感化はその子らにまた安中教会信徒らにも及んでいる。

(大学院神学研究科卒、安中教会牧師)



新島襄研究参考図書

My Younger Days 同志社校友会

新島襄の生涯

(J・D・ディヴィス著・北垣宗治訳) 同志社校友会

新島先生書簡集―続(森中章光編)

同志社校友会

新島襄書簡集(同志社編)

一岩波文庫 岩波書店

新島襄先生(徳富蘇峰著) 同志社出版部

新島襄―人と思想(魚木忠一著)

同志社出版部

新島襄(岡本清一著)

同志社出版部

新島先生と徳富蘇峰(森中章光著)

同志社

同志社九十年小史

(同志社社史史料編集所編)

同志社

雑誌「新島研究」

同志社新島研究会

新島襄(和田洋一著)

日本基督教団出版局

※比較的参照しやすいものを掲載